マイゾウ・メーノス（まあーまあー）の世界　ブラジル
　　ブラジルを訪問する人、ブラジルに関心のある人にお勧めする！！

梅津 久　記

第10話－交通マナー

ブラジルの交通事情は非常に悪く、交通道徳もなっていない。まず歩行者は歩道があっても歩道を歩かないし、横断歩道、まして歩道橋などは使わない、15年前位（1980年初期）に、サンパウロ市、東洋街近くのジョン・メンデス広場に日本のある企業の寄付により、大きく立派な歩道橋が出来たが、相変わらず市民は交通量の激しい中、身の危険を押して、車の間を走って横断し続けた、折角の立派な歩道橋は間小鳥が鳴いていた、結局数か月でその陸橋は取り壊されてしまった。これはほんの一例で、街の至る所で同じことが幾度となく繰り返されている、マナウスに移転して来てもまた同じ光景に出会っている、交通量が激しく横断するのに危険な所に陸橋を設置しても、面倒なので、陸橋の下を身の危険を侵して横断した人が車に跳ねられ死亡する事故が後をたたない。これは“何が危険で、安全” なのか理解出来ない彼等には無駄なことなのかもしれない。私はリベルダーデ街ガルボン・ブエノの橋から、下を通る高速道路ミニョコン（ミミズの意味で東京の首都高速道路と同じ）の車の流れを良く眺めていたことがある、100キロから140キロのスピードで走る車の間を人が一目散に横切る光景を感心して見ていたものである。

またもっと身近な光景では、子供連れのお母さんが、自分は歩道側を歩き、手を引かれた子供はなんと車がブンブン通る車道の方を歩いている、日本なら「あのお母さんちょっとおかしいいじゃない」ということになるが。ブラジル人はこの様に危険意識が非常に低く、仕事でも考えられない様な事故が頻繁に発生するので、わかりやすく簡単に繰り返しお教えることが必要である。

マナウスの工業団地、スフラマ（マナウス・フリーゾーン監督局）の前歩道、夕方仕事から帰るとき、仕事を終えた労働者達が道端の売店でビールを買って、中央車線の路肩に腰をおろし、足を車道に投げ出し座ってビールを飲んでいる。危なくて走れたものでない、どうして、歩道には机も椅子も用意されているのに。

また車は車で交通法規を守らない、交差点では赤信号でも車が突っ込んで来る、特に夜の交差点での青信号は、スピードを落として注意して通過しないと逆に突っ込んで来るので危ない、青信号は“注意信号”左右を良く確認して通過です。またウィンカーを出さずに急に曲がる車があれば、ウィンカーを点けたままで、曲がるのか曲がらないのか車もある「おいおい、お前の後ろには俺がいるんだよ、はっきりしてくれ」である。また割り込みが多く、法定速度で車間距離を保って走っていると、次々と割り込んでくる。さらにはオートドラムの世界の様に、車線をまたいで走っている車の後ろにつく

と一番ストレスになる、一人で二車線占領している、“おい、どちらかに寄ってくれよ”。また追い越し車線をのんきに走っている車も多い、いまにも壊れそうな古い車や、荷物を積んだ大型トラックが追い越し車線をのろのろ走っており、後ろから追いついて、パッシングしても、いっこうに走行車線に戻ろうとしない、まるで自分だけの道路みたいしている“ドーノ・ダ・ルア（道路のオーナー）”運転手が非常に多い。このように道路法規を知らず運転の下手な者を“バルベーロ（理髪師―下手な運転手）”と言って、手でひげを剃るジェスチャーをして相手をひやかす。

これらは、周りを気にして“こせこせ”と生活している日本人と違って“Go my Way（わが道を行く）”のゆったりした生活の現れかも。

―次回 第11話へ続く―